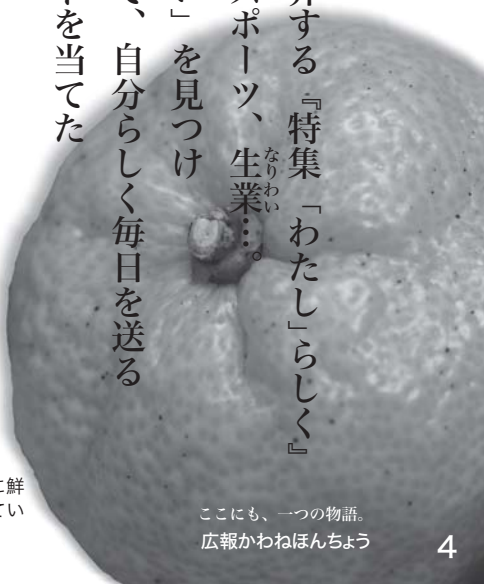


特集 それぞれの胸にきらめく勲章

「わたし」らしく

この冬、注目の人を紹介する『特集「わたし」らしく』ウォーキング、陶芸、スポーツ、生業^{なりわい}。暮らしの中で「生きがい」を見つけ心の豊かさに結びつけて、自分らしく毎日を送るそんな人たちにスポットを当てた



茶とゆずの複合農業に取り組む

庭から、柑橘系の甘酸っぱい香りが漂ってくる。胸いっぱい吸い込みたくなるその香りの正体は、出荷を目前に控えた「ゆず」だった。

農業経営統計調査に長年協力した実績が認められ、農林水産大臣から感謝状が贈られた野口直次さん。茶とゆずの複合農業に取り組んでいる。ゆずは12月上旬から冬至まで出荷の最盛期。庭先の倉庫には、出荷を待つコンテナや段ボール箱が高々と積み上げられていた。

直次さんは20年ほど前、役場の勧めで茶と平行してゆずの栽培を手がけ始めた。「そのころ、わさび、自然薯、ゆずなど作物ごとの部会が生まれ、お茶プラスアルファの『複合農業』が始まったんです。役場が熱心に指導してくれたおかげで、ゆず部会は軌道に乗り、数年前には組合を立ち上げるまでになりました。現在、

失敗も成功もあるから農業は面白い
農業経営統計調査の記帳農家として長年の貢献
農林水産大臣感謝状を授与された

なおじ 野口直次さん(水川)

農業経営統計調査

約10人の組合員が、熱心にゆず生産に取り組んでいます。

組合では近年、生産だけではなく、加工食品の開発にも乗りだしている。「川根ゆずは、まだまだよちよち歩きの赤ん坊のようなもの。世間の認知度は高くありません。今取り組んでいるマーマレードや酢、ジュースなどの加工食品も、販路開拓の一つの可能性です。幸いなことに、会員の元には大手スーパーや温泉施設などからの引き合いも入ってきているようです。これからもっと手をかけ暇をかけ、丁寧にゆずを育てていく必要性を感じています」。

農業の元気はまちの元気

近年では、地産地消の考え方が世間に広まり、地元で生産される食材を見直す動きが活発化している。消費者が「安心して口に入れられる食べ物」を求める傾向が強まっているのだ。このため出荷の際には、パツ

ケージにバーコードを付けるべきという指摘を受けたこともあると言う。

「健康ブームなども影響し、全国的にゆずの生産地が増えてきているようです。今後、産地間の競争も激しくなっていくかもしれません。わたしたちも、もっと勉強しないと」。

お茶もゆずも、多くの人の協力や先人の努力があつたから「今」が成り立っていると熱心に語る直次さん。感謝の気持ちが顔をのぞかせる。

「学べべきことはまだまだたくさんあります。失敗するたびに学び直しているようなもの。挫折も、偶然成功することもある。そうやって試行錯誤を繰り返すからこそ、新しいものが見えてくるし、やってみて良かったと思えるんです。農業は本町を支える大切な産業。お茶が元気ないと、町も元気がないように見えます。これからお茶も人も、そしてゆずも、元気でいられるような町にしていきたいですね」と朗らかに笑った。



のぐちなおじ

出荷を控えたゆずの品質をチェックする野口直次さん。農林水産統計調査・農業経営統計調査記帳農家として、20年間にわたり貢献してきた。「農業経営統計調査の協力を続けることで、改めて記帳することの大切さを実感しています。あとになってから生きてくるのがデータ。それが残っていることで、助けられることも多いんです」と話した。

▶野口直次さんが生産したゆず。目に鮮やかな黄色。甘酸っぱい香りを発している。ゆず湯などに最適。

ここにも、一つの物語。広報かわねほんちよう